OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	撫牛の初出と展開
Author(s)	茶圓, 直人
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 350-359
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

撫牛の初出と展開

茶圓　直人

1. はじめに

現在、天神社を中心に多くの寺社で、「撫牛」と呼ばれる牛の像が安置されている。これは撫でると縁起が良くなるという信仰で、参拝客はこれを撫で、吉事を祈っている。この撫牛の外見的特徴としては持ち運ぶことができないほど大きく、涎掛けがかけてあることが挙げられる。その縁起は、寺社によって様々だが、天神社では、祭神である菅原道真と牛の縁故が撫牛を安置する根拠となっている。一方で、京都市左京区松ヶ崎に位置する名刹妙円寺松ヶ崎大黒天では大黒天信仰を背景として、撫牛を安置している。その外見的特徴は他の寺社に安置されている撫牛とは大きく異なり、15cm 前後の、両手サイズで、額に大黒天像が載っており、涎掛けはかけていない。また、撫牛の下に蒲団が敷いてある点や安置されている撫牛と同じものを買い求めることができる点が特徴的である。

これら 2 つの撫牛は外見的特徴も、背景とする信仰も異なり、撫牛には、大きな撫牛と小さな撫牛の 2 種類があると言える。しかし、現在の撫牛の主流と言うべきは大きな撫牛であり、小さな撫牛はその数も少なく、例外的なものにも思える。また、撫牛の起源について各寺社に掲載されている縁起書では判然とせず、撫牛がいつごろから、どのような流れで現代まで残っているかについて、いまだ明らかになっているとは言えない。そこで、本稿では、主に文献調査を行い、撫牛の初出と、近代までの撫牛信仰の展開について分析し、近代までにおける撫牛の実態を明らかにしたい。

2. 先行研究

撫牛に注目した先行研究としては、大島（2008）や湯浅（1985）などが挙げられるが、事例の報告にとどまっており、その起源や特徴についての考察はなされていない。しかし、江戸時代の撫牛についてのみであれば、明治後半から大正にかけて活躍した山中笑によってその特徴が論じられており、主な主張は以下の 4 つである[1]。

1. 江戸で寛政初年から文化初年まで撫牛が流行し、文化初年からは叶福助が流行し、撫牛信仰は廃れる。

2. 京都伏見の人形窯元である保寿軒による縁起書が残っていることから、撫牛の起源は上方地方に求められる。

3. 洛外の村で大黒天の立像のような斑紋のある牛が生まれ、それを伏見の焼物師が土焼にしたものが撫牛の起源である。

4. 花魁社会から、武家社会まで広く撫牛を信仰した。

1. と 3. について、山中はこの説の根拠を明確に提示しておらず、これ以上の言及はでき

ない。2. ついては、叶福助も京都で起こり、江戸に伝わったため、撫牛も同様であるだろうと考察されている。また、保寿軒が発刊していたという縁起は湯浅や大島なども報告しており、本稿でも後に提示する。そして最後に 4. であるが、花魁社会については、『傾城買談客物語』[2]を根拠としており、また、武家社会で流行したと考察した根拠としては、田沼意次が撫牛をよく信仰していたことを挙げている。以降、本稿では、山中の主張を踏まえつつ、撫牛の事例を整理し、その実態に迫りたい

3. 撫牛の初出と展開

3.1. 撫牛の初出

管見の限りでは、撫牛という語が出てくる最も古い文献は伏見の人形窯元である保寿軒が発刊していたという撫牛の縁起書である。残念ながら、現物を手に入れることができず、ここでは、最も早くに報告している塩見（1967）からその縁起書を引用する。（以降の引用資料の下線は筆者による。また、すべて原文ママである。）

開運撫牛縁起[3]

「抑この撫牛といへるは尊位の御家伝たる事年久しむかし尊位に造願し奉り命によつて伝来のごとく御伝法を以て撫牛を造りさし上るにますます其後かそへかたし世に引求乞人しきり也、然るに其伝来故有之予家に相祭りし玉へり今に子孫に伝へ来るを以て造り願ふ人に譲るなり。」

開運祭る伝

「つねに居間に卓やうのもの或はちがひ棚なとにすへ置しん願たなこころなく大黒天を念し常に此牛をなでさするときは吉事日にまし家運誠に広大に霊功あり牛相応のふとんをしき其上に祭りて吉事ごとに一つづつまして祭也。又牛の日毎にあづきもちをそなへさげ初穂はまづ祭る人家いただき其余ハ心にまかすべし其他何によらす他より来る品をそなへる也。祭る人家のはんゑい心にまなるべし」

出世大黒天祭の法

「世に大黒天は実に高貴の作にて則

御影御守此牛の頭に勧請し奉る事なり其心を以て広くつねづねなでさすり志願をいのるなり

甲子のばんは煎茶を供し其茶をそまつにせずして一人いただき外の人々のぶる事なし右の牛をうけてより初の甲子黄色染木綿のふとんに置き財布を自身縫て牛の腹に入甲子毎に小玉銀にても一つづついくつにても納め置き其内主人又目うへの人に金銀財宝を得て増ます納め玉へと　敬　白

延享三年亥十一月吉日

城州伏見海道稲荷前黒門角

保　寿　軒」[4]

また、塩見は、同時期に異なる縁起書が刊行していたことも報告しており、そこからは伏見に店を構えていた人形窯元の間で撫牛の本家争いが見て取れる。以下に引用する。

神授開運撫牛縁起

抑開運撫牛といへるは、其昔し人皇四十二代元明天皇御宇和同四年二月九日（此日二月の初午の日なり）に、五社の御神此稲荷山三ケ峯へ天降りましませしよりこのかた、数百年を経るといへども、年毎に二月初午の日を以て祭り詣る事今にたへせず。先づ竈ヶ塚御膳ヶ谷は則行場なり、一ノ峯二ノ峯三ノ峯鎮座ましまし、剣石は命婦の社なり。其比社下官の者深信心おこし朝夕尊信大かたならざりしに、或夜夢でもなくうつつでもなく明神出現ましまし告て宣く、御山麓の土をもって此撫牛を作り信心の者に授くべしと、あらたなる神告を蒙りしより、連年予が家にて作り弘むるなり。信仰の輩は身分相応の立身して諸願成就するなり。又両人は思ひよらざる幸福をうけ子孫繁栄長くすること世の人の知る所なり。

祭り方

毎月朔日十五日廿八日に初水を上げ燈明を献じ、あざけるの心なく〇〇〇〇に祭り初むるなり。少しの幸せにても又は露銀にても何成共撫牛の〇〇中に納め置段々数多く成候へば、全金に替納置事也。延享年中此右撫牛か伝来して広く授け申事也。

延享四丁卯年二月大吉祥日

城州伏見稲荷　　木村虎悦（印）

御目印（商標山上入り）

同様の撫牛を作り紛敷縁起を付売弘候とも誠にあらずかへって明神様のをそれあることなり能く名所御改御信心相成候。」[5]

この２つの縁起書を比べてみると、異なる点が多々あるが、特に、保寿軒の縁起書において大黒天信仰を背景とし、蒲団を用いて撫牛を祀る点が特徴的である。（以下に提示する資料では、保寿軒の影響と思われる大黒天と蒲団をキーワードとして、両者に二重下線を引いている。）また、保寿軒が伏見の人形窯元であった点は、先にも述べたが、木村家の縁起書によると、稲荷山の土を使って撫牛を作るとあり、これらは伏見人形の特徴である。

伏見人形とは、伏見稲荷大社の周辺で古くから作られてきた土人形の一種である。石沢(1984)によると、第二次世界大戦前までは伏見街道沿いや稲荷山、深草あたりから土を採取したものから作っており、江戸中期までの古文献によく見られた伏見人形は撫牛のほかに、土狐、西行、布袋などであるという。また、狐は稲荷大社の神使、西行は盗難除け、布袋は火伏せのまじないとして用いられることから、伏見人形の初期は信仰的要素が強い

人形だったと考察している。木立(2001)では、伏見人形が日本最古の土人形であるという通説には否定的な見解を示すも、「伏見人形が日本各地の土人形に強い影響を与えたことは間違いない」とし、また、土人形が民間信仰を色濃く反映している点を指摘している。つまり、伏見人形は土人形の起源とは言えずとも、それに近い種類の土人形であり、信仰玩具としての側面が強かったと思われる。後に具体的な資料を提示しつつ、撫牛の様相を説明していくが、撫牛の多くは土人形であり、信仰玩具としての側面が大きかったことは本稿で示す資料から明らかであると言える。したがって、撫牛の起源は伏見人形に求めることができると考えられ、だとすれば、延享 3 年（1746 年）に発刊された保寿軒の縁起は撫牛の起源にかなり近いものであると考えられる。

3.2. 田沼と撫牛

山中は「砂払録」において「『談海』」と紹介して、以下の記述を引用する。ただし、『談海』とは、江戸幕府や諸大名を中心とした政治、経済、社会上の諸事件を収録するものであり、以下の引用文は『談海』ではなく、津村正恭の随筆『譚海』巻十一のものである。

> ○田沼主殿頭殿銀にて牛を拵て側に置、平日呪文を唱て撫でらるゝ。當時立身並なく老中に迄昇進ありし故、専ら世間に行れて、呪文唱る譯は知らぬ人も、牛を拵へて撫る人多し。此呪文察するに、大威徳明王の陀羅尼成べし。（後略）[6]

上記によると、田沼意次の類稀なる立身出世の理由として、撫牛が用いられている。これが事実であったかは定かではないが、当時、田沼の出世は撫牛によるものだという噂が流布していたことはこの記述からうかがい知れる。また、山中は『後見草』の記述についても述べていたが、こちらも山中のミスなのか、『後見草』の本文には撫牛についての記述は見られなかった。そこで次に『譚海』の「牛を拵へて撫る人多し」という記述について検討してみる。田沼意次が老中に就任したのは明和 9 年(1772 年)のことであるが、『譚海』巻十一は天明七年に書かれたと推測されている。撫牛の資料については、まず、寛政年間の資料として、寛政 6 年(1794 年)に発刊した『軽口四方の春』巻之三「元三大師の御影」[7](著者不明)や、寛政年間に発刊された三亭春馬の著書『里の花　川の月　春秋二季種』第二編巻之中第十一段[8]、同じく寛政年間発刊の振鷺亭による『客衆一華表』[9]などが残っている。天明年間の資料としては、斎藤月岑によってまとめられた『武江年表』の「天明年間」という記事において、「撫牛行はる。」[10]とあり、これは撫牛が流行していたのか、少なくとも、撫牛が斎藤月岑の目に留まったのであろう。また天明 7 年（1787 年）に巻一を発刊した、松葉軒東井の著書『譬喩尽』の巻三にも撫牛についての記述が見られた。[11]

以上のように、寛政、天明年間になると撫牛の記述が多く見られるようになるため、寛政、天明年間に撫牛が流行していたものと考えられる。また、田沼が老中に就任した直後の安永年間についても、撫牛流行の可能性は十分考えられる。しかし、武家社会で撫牛を

信仰されていたというような記述はなく、山中の説には疑問が残ると言える。

3.3. 遊女と撫牛

山中は撫牛信仰の対象者として、武家社会のほかに花魁社会、つまり遊女を指摘していたが、たしかに、花魁社会で撫牛は流行していたようである。上方、江戸の両地域においての見聞をまとめた喜田川守貞著『守貞謾稿』巻二十二（天保 8 年（1837 年）巻一起草）では、関東遊女街の遊郭の見世の間に縁起棚を設け、その傍らに蒲団を敷き、撫牛を置くと述べている[12]。また、明治 25 年 4 月から翌 26 年 7 月まで朝野新聞で連載された「徳川制度」（著者不明）を原題とする『江戸町方の制度』では、遊郭の内証（楼主の部屋）に蒲団を敷いて撫牛を置いていたという[13]。両者の記述には細かな違いはあれど、遊郭には撫牛を置くという習慣があったのだと考えてよいだろう。さらに、三代歌川豊国によって描かれた『十二支乃内』「丑」[14]（嘉永 2 年（1849 年））や、歌川国芳によって描かれた『撫で牛』[15]（推定文政 12 年（1812 年））には遊女とともに撫牛が描かれている。これらの絵において、撫牛の下には蒲団が敷いてあったことも留意しておきたい。

以上のように、山中の提示した『傾城買談客物語』以外にも、花魁社会と撫牛の関係性を示す資料は見られたため、花魁社会では確かに撫牛が信仰されていたと考えられる。また、山中は文化以降、撫牛信仰が廃れたと述べていたが、これまでに見たように文化以降の資料は多く残っており、文化以降も流行していたとは言えずとも、廃れてはいなかったと考えられる。この文化以降の資料についてはここまで報告した以外のものも多く残っており、次節以降はその点も併せて参照されたい。

3.4. 江戸期撫牛の展開

3.4.1. 地方の撫牛

江戸や上方地方以外の地方においても撫牛が散見される。まず、鳥取県の安養寺という寺では「撫牛御授之儀」が執り行われていたようである。ここでは、その様子をうかがい知るため、『鳥取県史　第 10 巻　近世史料』にまとめられた『在方諸事控』の文化 15 年（1818 年）11 月 19 日の記事を引用する。

> 前記有之安養寺撫牛之儀、左之立札致し候旨、御山奉行共より申達ス。尤来ル廿二日御用日御家老中へ差出候事。
>
> 定日
>
> 十二月朔日　　同十九日
>
> 右撫牛御授。尤二夜三日大般若執行。有栖川宮御発起開運撫牛御札弘メ之儀ハ、御国表御聞済之上、信心之輩へ以御聞可令授与もの也。
>
> 月日　　当山役者[16]

以上の資料から、「撫牛之儀」と称して、撫牛を信者に配っていたようである。また、先に紹介した大島（2008）において、宮城県の仙台歴史民俗資料館に所蔵されている撫牛の腹中に次のような縁起書が残されていたことが報告されている。

この牛を撫でさする時は、吉事未(来カ)家運上昇し火の霊に寄らるべし。
奥州仙台領名取群南方植松邑
正一位　　大明神金剛遊山
文久年甲子稔大族　小稔大家族
弘誓寺[17]

文久年間の甲子といえば、文久 4 年（1864 年）のことである。撫牛が火の霊除けとなっている点は他の撫牛には見られないが、やはりここでも、寺が主となって、信者に撫牛を配っていたと考えられる。この 2 つの事例が意味するところは、地方において、寺を媒介として撫牛信仰が広まっていたということであり、江戸や上方地方とはまた異なった展開の仕方をしている。また、太田全斎が編纂した『俚言集覧』では「なで牛　近来土にて素焼にしたる牛を云江戸日本橋邊に是を作りて乞人に價をとりてやる商家あり價貴人は貴く賤人はいやし是を得て小き蒲團の如きをしきて祭るよき事有る度毎に蒲團を重めるなり」[18]と述べている。『俚言集覧』は発刊年不明だが、太田全斎の生没年は 1772 年から 1843 年であるため、おそらくは 1800 年前半に書かれたと考えられる。したがって、おそらく 19 世紀初頭あたりになると、撫牛信仰の新たな展開として、撫牛を人に与えることで、更なる幸福を得るという信仰（噂）が流布していたのだろう。そして、それを背景に各地方では、寺を媒介にして人々に撫牛が配られていたのだと考えられる。

3.4.2. 庶民生活と撫牛

その他、文化以降においても、庶民生活の中で撫牛が根付いていたようである。浜松歌国によって編纂された『摂陽奇観』巻四十四の文化 2 年（1805 年）の記事では、「開運撫牛　諸人信じて蒲団を縫て土の牛に敷せまたハ背に着せて富貴を祈り燈明供物を献じて祭ル事流行ス」[19]と記述され、また、寛政 10 年発刊の『誹風柳多留』二七篇二五丁では、「撫牛の夢は敷ぞめ苦労也　三朝」[20]、文化 4 年発刊の同三六篇二〇丁「撫牛のやうに寐て居るけちな晩　松哥」[21]という川柳も残されている。このように、撫牛が庶民生活の中に根付いていたという根拠となる資料は数多く残っている。したがって、江戸時代における撫牛信仰は現代以上に盛んで、かつ全国で普及していたとまとめてもよいだろう。

また、山田徳兵衛の著書『京洛人形づくし』に所収している初版年不明（再版：嘉永 6 年（1853 年））の「お手遊ひな人形の故実」の「撫牛人形」では、「（前略）牛は長命にして数百貫目をも重しとせず、人のため運送し又は耕作のたすけ第一にて、国益ある獣なり。天満宮もこれを愛したまふといふ。（後略）」[22]とあり、江戸時代における撫牛についての説

明のなかで、管見の限りではあるが、唯一、天神信仰について触れているものである。しかし、ここでは天満宮が「撫牛」を愛しているという記述ではなく、天満宮が「牛」を愛しているという記述であり、撫牛と天神信仰を直接的に結びつける記述とは言えない。だからといって、天神信仰が後付けの文化だったと言うには早計だが、天神信仰と撫牛の関係については慎重に考察を進める必要があるだろう。

4. 撫牛の展開―近代

江戸時代において撫牛は広く人々に認知されていたと考えられるが、それは明治時代に入っても変わらないようである。まず、樋口一葉の日記「みづの上日記」の明治 29 年（1896 年）6 月 2 日の日記[23]には「撫牛のやうに」という言葉が出てくる。この「撫牛のやうに」という言い回しだが、近代において慣用表現として認知されていたようである。昭和 11 年（1936 年）に出版された『大辭典』下巻[24]では「ナデウシノヨー　撫牛のやう　ひとり蒲團の上に坐させし時にいふ。置物の撫牛に譬へし語。」とされており、つまり、「撫牛のやうに」という表現は蒲団の上に座っていることを揶揄した表現であり、辞書に載る程度には慣用表現としての立場を確立していたことが分かる。そして、実際の撫牛の事例としては川崎巨泉が大正 8 年（1919 年）から昭和 7 年（1932 年）にかけて全国の玩具を収集、編纂した『巨泉玩具帖』や『玩具帖』に見られる。これらは手書きの絵とともに、大きさや色、種類などがメモ書きとして書かれている。川崎の報告している事例としては、「大阪四天王寺境内三面大黒天撫牛　二種」[25]、「松ヶ崎大黒天より出す撫牛」[26]、「伏見撫牛」（同タイトル 2 種類）[27]、大阪府の事例として「撫牛」[28]の 5 つを残している。これらの共通点としては土焼黒塗りかつ持ち運べる程度のサイズであったことが挙げられる。

次に、近代に入ってから撫牛がどのように説明されていたかについては、昭和 4 年（1929 年）に出版された『言泉：日本大辞典』[29]では、「撫牛　素焼などにて、臥牛形を造れるもの。多く天満宮の社より出だす。常にこれを撫づれば、吉事ありといふ。又、吉事ある毎に蒲団一枚を作りて重ね、その上に牛を安置す。」とされており、また、先にも挙げた『大辭典』下巻も同様の記述だった。管見の限りではあるが、この時点で初めて、天神信仰を背景とした撫牛の説明が見られた。これらの記述は現代の撫牛が主に天神社に安置されているという点を鑑みると重要な記述であると思われる。ただし、蒲団を用いるという点で現代の撫牛とは同一視できない。また、大島（2008）では、さがの人形館所蔵の撫牛の腹中には以下のような縁起書が残っていたことを報告している[30]。（紙面の関係上、一部抜粋。）

> 縁喜撫牛(福運者ハ誰？)
> ◎乙丑ハ六十一年目ニ廻ッテ来ル最モ縁喜ノ好イ丑年デ此ノ年ニ当ッテハ古来縁喜ノ神トシテ撫牛ヲ祭リテ一家ノ福運ヲ祈ッテ来タモノデアリマス。此ノ年ニ作ッタ撫牛ヲお祭リスレバ禍ヲ転ジテ幸福ヲ得商買繁昌無病息災家運長久ノ幸福ヲ招キ家畜類ニ

至ルマデ無病安全ニシテ威大ナル神徳ノアルコトハ遠キ古ヨリ人ノヨク知ル処デアリマス。

◎此ノ牛ハ毎朝牛ノ背ヲ撫デ一心ニ神ヲ念ジテ祈願スルモノデアリマス。然シテ御利益ヲ得ラレタルトキハ其ノ都度座布団ヲ作リ撫牛ニ敷カセ願望成就ノ御礼トスルモノデアリマス。（中略）

◎尚ホ其ノ上皆サンノ福運ヲ深カラシメンガ為メ左記ノ通リ抽籤ニヨリ福品ヲ差上マス。

撫牛一体ノ頒布料金参拾五銭也　壱体ニ付抽籤券壱枚差上マス。

福品ノ種類及ビ点数（全数一五、０００体ニ対シ）

一等　十八金製総丈五分大黒天尊像(但し俵ハ銀製)　九体　糸岐本店製作

二等　純銀製　仝　黒天尊像　三十体

三等　陶器製　大黒天尊像　三百体　中原師製作

　　一白くじなし

◎福運抽籤方法ハ二月三日節分ノ夜坂上天満宮境内ニ於いて公平ニ執行シ、当籤番号ハ長崎日日新聞ニ広告致シマス。

◎詳細ナル規定ハ抽籤券ニ記入シアリ。

本博多町坂上天満宮境内

撫牛頒布会[31]

これはおそらく大正 14 年（1925 年）の資料だと推測されるが、ここで注目したいのは、この縁起書が天満宮の事例でありながらも、菅原道真と牛の縁故という文脈で撫牛が語られていないという点である。天神信仰では、牛は神使として重要視されているが、この事例は、撫牛一体につき、大黒天像が当たる抽籤券が 1 枚ついてくるというしくみであり、そこからは撫牛と大黒天の関係性は感じさせるが、天神の神使とみなしているような印象は感じさせない。また、これは長崎県の事例であるが、江戸時代と同様に、地方において撫牛が広まっていたようである。福島県では、会津柳津福満虚空藏菩薩円蔵寺について、大正 2 年（1913 年）に柳渓長谷川美材によって書かれた『柳津霊境誌』が残っており、そこには「開運撫牛」という章が設けてあった。その内容は紙面の関係で引用できないが、虚空藏菩薩と撫牛の縁故について、そして、大黒天の本地が虚空藏菩薩であると述べており[32]、この記述は会津柳津福満虚空藏菩薩円蔵寺において大黒天に関わりを持つ撫牛を祀っていた、もしくは頒布していたことを示していると考えられる。

以上のように近代においても、江戸時代と同様に都市部だけでなく、地方においても撫牛は信仰されており、大黒天信仰を背景としている撫牛が多く見られたようである。ただし､江戸時代の資料では寺を媒介とした撫牛の展開の事例以外見ることができなかったが、近代の資料では寺だけでなく、神社を媒介とした撫牛の頒布が見られた点で江戸時代の資

料との相違点が見られた。また、興味深い点としては、撫牛についての認識のなかで天神信仰が台頭してきているという点が挙げられるが、菅原道真との関わりがない点や蒲団を用いて祀る点において現在の撫牛とは異なっていたと言えるだろう。

5. おわりに

以上、江戸時代から近代にかけての撫牛の事例を整理し、その特徴について考察してきたが、その中でも目立った特徴としては、蒲団を用いるという点だった。多くは蒲団を撫牛の下に敷き、吉事ごとに蒲団を増やしていくというものだったが、『摂陽奇観』のように、蒲団を撫牛に着せるというものもあり、蒲団の用い方にもバリエーションが見られた。以下には、本稿の調査結果をまとめることで、近代までの撫牛の実態を見出したい。

・大黒天信仰を背景とし、蒲団を用いるものが多かった（保寿軒の縁起が優勢だった）。
・特定の対象者ではなく、広く一般に普及していたものと考えられる。
・持ち運ぶことのできるサイズで、販売、もしくは頒布されるものだった。
・大きな撫牛についての記述や天神信仰との関わりを示す確たる資料は見られなかった。

現在、撫牛の多くは持ち運びができないほど大きく、販売されている物は少ない。多くは涎掛けをかけてあり、寺社、主に天神社に安置されている。妙円寺松ヶ崎大黒天の撫牛のような持ち運びができるほど小さく、蒲団を敷き、大黒天信仰を背景としている撫牛はそのなかで例外と言えるだろう。しかし、近代、少なくとも昭和初期までは、撫牛といえば、持ち運びができるほど小さく、下に蒲団を敷くものだったと考えられる。そして、多くは大黒天信仰を背景にしていた。以上のことから考えると、昭和初期までにおいて、一般的に撫牛と呼ばれたもの、言い換えれば、昭和初期までの撫牛の主流といえるものは、現在の妙円寺松ヶ崎大黒天に安置されているタイプの撫牛だったと言えるだろう。

本稿の調査によって、小さな撫牛は決して例外的な事例などではなく、むしろ近代までは盛んに信仰されてきたことが明らかになった。そして、撫牛はある一部の地域や対象の民俗ということでもなく、媒介となる寺社の信仰にあわせて少しずつ背景を変えながら、全国で信仰されてきたと言える。しかし、本稿では、小さな撫牛についての記述ばかりで、大きな撫牛についての記述を見ることができなかった。また、現在の主流と言うべき天神信仰における撫牛についての資料も提示できていない。今後の課題としては、大きな撫牛に注目した調査と天神信仰と撫牛の関係性に注目した調査を行っていく必要があるだろう。

参考文献

石沢誠司　「土人形」永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史　第四巻　窯業』
　日本評論社　1984 年　pp.278-286
大島建彦　『疫神と福神』「撫牛の縁起」　三弥井書店　2008 年　pp.327-339
木立雅朗　「伏見人形の成立と発展をめぐる二つの背景―近世窯業の発展と精神文化―」

『立命館大学考古学論集』 2001 年　pp.411-430
塩見青嵐『伏見人形』河原書店　1967 年
日本書誌学大系 46(1)　『山中共古全集一』「砂払録」　青裳堂書店　1985 年　pp.29-30
日本書誌学大系 46(1)　『山中共古全集二』「影守雑記」　青裳堂書店　1985 年 p255
湯浅隆義　『開運撫牛攷―牛神古社探訪記―』　蒼洋社　1985 年

注

[1] 主に参考文献に挙げた『山中共古全集』を参考にした。共古は山中の筆名である。
[2] 式亭三馬『傾城買談客物語』1799 年　国立国会図書館デジタル資料 p2、p8
[3] この部分は、湯浅や大島の引用では「本家伝来　開運撫牛縁起」となっており、おそらく塩見の引用ミスだと思われる。
[4] 「本家伝来開運撫牛縁起」（塩見青嵐『伏見人形』河原書店　1967 年　p44-45 に所収）
[5] 「神授開運撫牛縁起」（注 4 と同　p46−47 に所収）
[6] 『日本庶民生活史料集成第八巻　見聞記』　三一書房　1969 年　p181
[7] 2019 年 6 月 16 日検索　噺本大系本文データベース (http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon) 検索ワード「なで牛」
[8] 帝国文庫第 19 篇『人情本傑作集』博文館　1928 年　p235
[9] 洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』19 巻　中央公論社　1983 年　p201
[10] 東洋文庫 116『増訂武江年表 1』平凡社　1968 年　p223
[11] 松葉軒東井編　高羽五郎校訂『譬喩尽』巻三　1954 年　国立国会図書館デジタル資料 p172
[12] 喜多川守貞著　宇佐美英機校訂『近世風俗志(三)(守貞謾稿)』岩波書店　1999 年　p358
[13] 石井良介編『江戸町方の制度』新人物往来社　1968 年　p157-158
[14] 都立中央図書館特別文庫室所蔵
[15] 千葉市美術館所蔵
[16] 『鳥取県史　第 10 巻　近世史料』鳥取県　1980 年　p1153
[17] 大島建彦　『疫神と福神』三弥井書店　2008 年　p336 に所収
[18] 太田全斎編『俚言集覧　自筆稿版第二巻さ・た・な』クレス出版　1992 年　p635
[19] 船越政一郎編『浪速叢書　第五』名著出版　1978 年　p376
[20] 岡田甫校訂『誹風　柳多留全集　新装版二』三省堂　1999 年　p319
[21] 岡田甫校訂『誹風　柳多留全集　新装版三』三省堂　1999 年　p186
[22] 山田徳兵衛校訂『京洛人形づくし』「お手遊ひな人形の故實」芸艸堂　1938 年　p72
[23] 前田愛・野口碩編『全集樋口一葉　第三巻日記編』小学館　1979 年　p313
[24] 下中邦彦編『大辞典　下巻』平凡社　1974 年　覆刻版第 2 刷
[25] 2019 年 6 月 16 日検索　川崎巨泉『巨泉玩具帖』第 4 巻第 4 号　人魚洞文庫データベース (https://www.library.pref.osaka.jp/site/oec/ningyodou-index.html)　検索ワード「撫牛」
[26] 注 25 と同　第 1 巻第 6 号
[27] 注 25 と同　第 1 巻第 7 号、第 5 巻第 3 号
[28] 川崎巨泉『玩具帖』第 1 巻 48 号　以下注 25 と同
[29] 落合直文著　芳賀矢一改修『言泉：日本大辞典　第 4 巻つ - ひ』日本図書センター　1981 年　大倉書店昭和 4 年刊の複製
[30] 大島は「同館の理事長の池田萬助氏からご教示いただいた」と述べているが、2019 年 5 月 13 日に筆者が同館に問い合わせたところ、同館では、現在撫牛の展示はしておらず、おそらく未整理品のひとつであろうとのことだった。
[31] 注 17 と同　p337-338 に所収
[32] 柳渓長谷川美材『柳津霊境誌』「開運撫牛」1913 年　国立国会図書館デジタル資料 p15